



第 21 回交流会 光州大会を前に

藤田

日韓合同授業研究会交流会の重要なプログラムの一つがフィールドワークである。毎回、その地域の史跡などを見学したり、その地域の運動にかかわる方の話を聴いたりする。韓国で行うフィールドワークでは、日本の侵略の歴史と並んで、南北統一の課題を大切なテーマとして取り上げてきた。この課題に向かうとき、朝鮮戦争で分断され、軍事国家となった韓国政府から激しい弾圧を受け、そこから民主化を勝ち取った民衆の姿が浮かび上がる。私たちは、済州島など、この課題を考えるべき場所を見学してきた。だから、今年の交流会が「光州」で行われるときいたとき、「ついに」という思いになった。全斗煥軍事政権下の韓国政府が1979年5月18日金大中をはじめとする民主化運動にかかわる人々を多数逮捕したことに始まる光州の激しい弾圧と抵抗は、その後の韓国の民主化運動の出発点として人々に記憶されている。同じ国の若い兵士と市民が銃をもって向き合い、多くの人の命が失われた悲しい歴史の前に立つことは、私たちの今を問わずにはいられないこととなるはずだ。

2015年5月14日、日本政府は、憲法を欺き、日本を戦争のできる国とする戦争法案を閣議決定した。武器の輸出によって金儲けをする国は、常に「敵」の存在を作り出す。「平和」という言葉が、「戦争によって自分の国を守ること」として使われ、武力が肯定される国となる。私たちはこのような時代に生きている。

目次

第 21 回交流会光州大会を前に	1
「あたまにつまった石ころが」 の授業を終えて	3
万葉集を読み返して その二	4
解放・敗戦 70 年と排外主義	8
第 21 回交流会 光州大会について	10
短信	10

武力の肯定は法律の世界だけのことではない。この考え方を国民のものとするために、マスコミや宗教、そして教育が用いられる。すでに教育基本法が改定され、改悪基本法の精神を実現させるための法案が次々に出されている。特に現在進められている道徳の教科化は、人々をアジアの侵略戦争へ向かわせた教育勅語を中心とする修身の復活を目指すものと考えられる。子どもたちの心を国に利用させてはならない。

国語の教科書（三省堂4年）に「あたまにつまった石ころが」というアメリカの物語がある。その男は子どものころから石ころが好きで、人に会うと自分が拾った石ころを自慢していた。父親のガソリンスタンドで働くようになると、自分の家を改造し、集めた石ころを並べた。安い車が普及されると部品を修理して儲けた。不況になり仕事が減ると店を父に任せ、石ころを拾いに行った。結婚して仕事を探さなければならなくなっても、なかなか仕事が見つからず、見つかっても日雇いの仕事で、仕事がない日は町の博物館で石ころを見て一日を過ごした。お金があるときもないときも変わらず石ころを愛し続けた男は、ある日博物館の館長に声をかけられ博物館の警備の仕事を得、働きながら石ころについて学び、大学へも行き、ついには博物館の館長になる。

この奇妙な物語の授業を若い教員にお願いした。彼女は、少人数算数担当となっているが、担任を希望しており、専門は国語である。

3時間かけてこの男の物語を年表にまとめ、そのあと2時間、この男の物語をもとに「幸福」について子どもたちと語り合った。この男はなぜ幸福になれたのだろう。「好き」という気持ちが「幸福」にさせた。運があった。この時の出来事がなければ、あの時の出来事がなければと、子どもたちは、この男の人生について検討した。どんなときにも努力を忘れなかったと考えた子もいた。人との出会いが彼を幸福にしたと考えた子もいた。世の中の価値観とは異なる男の物語から多様な考えを出し合い、共有した。

最後に彼女は自分の話をし始めた。自分が教員になったのは、自分の弟が体調を崩し、参加が難しいと思われた中学校の運動会のクラス全員リレーの中、弟だけ1mの距離にして参加させた担任の思いに感激したことが契機となった。彼女は自分の価値観を押し付けるのではなく、自分はこの物語を読んでそのことを考えた話し、授業を終えた。

私は、この若い教員と子どもたちが、自由に「生き方」を考え、話し合う姿を見ながら、幸せな気持ちに浸っていた。学校とは、このような豊かさをもつ場であるはずだ。大人が勝手にあるべき人物像をつくり、大人の価値観を押し付けるのではなく、子どもたちが自由に自分の考えを表現し、他者の考えと出会っていく。学校は「子どもには思想がある」ということを大切にできる場であってほしいと願う。

私たちは今年、光州で語り合う。自由と人権のための闘いを学びながら、自由と人権が握りつぶされ、日本を戦争ができる国にしようとしている今、私たちが子どもたちのことを語り合う。この時を多くの人と共有したい。

「あたまにつまった石ころが」の授業を終えて

長濱

「あたまにつまった石ころが」は、作者の父の人生を描いた実話であり、「石」に情熱と愛情を傾けた父の生き方が、娘の視点から語られています。私が初めて本文を読んだとき、「父ほど幸福な人生を送った人を、わたしは、ほかに知りません。」という結びの一文が強く印象に残りました。

好きなことを仕事にできれば、これほど幸せなことはないでしょう。しかし、誰もが好きなことを仕事にできるとは限りません。それでも、二分の一成人式への取り組みを通して、将来の夢を具体的に考え始めた四年生にとっては、自分の好きなことや得意なことを追求していくことが幸せにつながるかもしれないという希望を感じられる教材だと思います。父の思いや生き方を考えることが、自分の生き方を考えるきっかけとなればよいと思い、授業に臨みました。



読むことの学習をする際に、意識するよう心がけていることがあります。

それは、正解を求めるものにはしないことです。読むために必要な基礎・基本は学習するけれど、どう読むかといった読みは個人のものであり、文章を読んで自分の考えをもつことを大切にしたいと思っています。そのため、児童の感じ方・考え方や交流によっては、教師側がまとめようとしていた内容と多少のずれが生じることもありますが、それもよいのではないかと感じています。児童と一緒にになって課題と向き合い、話し合っ作り上げていく。どこか道徳的な、そんな国語の学習があってもよいのではないかと今回の学習を通して思いました。

単元の最後に、「私がなぜ教師になりたいと思ったのか」という話をしました。単純に「教えることが好き」だった子どもの頃の私が、「教えることを仕事にしたい」と強く思うようになった背景には、人との出会いと家族の存在がありました。決して明るく笑って話せるような話ではありませんでしたが、この学習に真剣に取り組んでくれた四年生の児童に、どうしても伝えなかった話だったので。

「あたまにつまった石ころが」から多くを感じとった四年生。彼らと学習する国語の時間は、私にとって、とても幸せな時間となりました。

万葉集を読み返して その二

吉川

今回は防人歌（さきもりうた）について述べてみたい。まず、私の郷土にゆかりのある防人歌二首を読んでほしい。

①橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも

4371

橘の木陰を吹き抜ける風がかぐわしい香りを運んでくる筑波の山、あの山をどうして恋い焦がれずにいられようか。といった意味である。これは万葉集に収められた防人の歌で、占部広方の作である。橘とはみかんの一種。筑波山麓は古代からみかんの栽培で知られており、広方の住んでいた所も橘郷と呼ばれ、盛んに橘が栽培されていたという。防人として赴任中に橘の花の香りに気づいて、おもわず筑波山を思い出し、恋しくなって詠んだものと思われる。平野の真只中に立つ筑波山はどこから眺めても姿が美しく、今も昔も茨城の象徴的存在であるが、殊に広方の住んでいた橘郷は霞ヶ浦沿いにあり（現在は行方市羽生）、湖の向こうに筑波山がそびえる絶景ポイントだった。広方にとって筑波山はふるさとそのものだったにちがいない。それにしても、1300年も昔、東国の果ての常陸の国で、「橘の下吹く風」という、この洗練された表現の美しさには目をみはらずにはおられない。

②霰ふり鹿島の神を祈りつつ皇御軍士(すめらみくさ)に

われは来にしを 4370

霰が降ってかしましいというがその鹿島の神に祈りながら天皇の兵士として私はやって来たのに、という意味。防人として徴兵され、はるばる筑紫の国まで出かけていく防人たちの行く手にははかりしれない困難や危険が待ち構えていたことだろう。常陸の国の防人たちはまず、鹿島の神に無事を祈って出かけていったようだ。これは現在のひたちなか出身の大舎人部千文という人の歌で、そのあたりからも鹿島を回って旅立ったことがわかる。「すめらみくさ」とは天皇の兵士という意味で軍国的であるが、「来にしを」には、しかしそう決心して出立したのになあ、となにか心残りがあるといふ心がすけてみえる。鹿島では現在もこの防人たちの「鹿島立ち」にちなんで、春先に祭頭祭（さいどうさい）という祭りが行われている。私の勤務した鹿島高校の生徒たちも祭頭祭で防人役の派手な衣装に身を包み、棒を振り回していたものである。東国は防人たちのふるさとである。万葉集には常陸の国の防人歌10首を含め、上総、下総、相模、武蔵、上野など10カ国の防人歌84首が収録されている。

防人とは、奈良時代に九州沿岸の警備のために東国から派遣された兵士たちである。朝

廷は百済から救援要請を受けて朝鮮半島に派兵したが、663年に白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗したことを契機に、唐・新羅の来襲に備えて664年に東国から徴兵したのが始まりで、東国からの徴兵は757年まで続いたという。定員は3000人。任期は3年、21歳から60歳の男子の中から選ばれた。若い兵士だろうか、次のように詠んでいる。

③父母が頭かきなで幸くあれて言ひしけとばぜ忘れかねつる

4346

④母刀自に玉にもがもや戴きてみずらの中に合え巻かまくも

4377

③の「けとば」とは言葉の方言、無事で居ろよという父さん母さんの言葉が忘れられない。

④は母さんがもし玉だったら俺の髪の毛の中に巻きこんで連れていくのに、という泣かせるような息子の歌。防人に命じられるのも突然なら、集合場所の国府に集まるのも短日の間で、慌しく旅立ちの準備をして出かけなければならなかったようだ。まるで赤紙のようではないか。

⑤防人に立たむ騒ぎに家の妹が業るべきことを言わず来ぬかも

4364

「妹」とは妻や恋人をさす言葉。防人を命じられて出発の準備に追われ、妻に仕事の手順を言うのを忘れて来てしまったと嘆く歌である。家族との別れもそこそこに、防人たちは家族の心配をしながら、故郷を後にした。防人部領使（さきもりことりづかい）に付き添われて難波まで約30日間の行程を陸路で行く。その間の食糧、武器、衣類の類はすべて自前であったというから驚きである。いったいその間の食事はどうやって調達したのだろうか。難波に集結した防人たちはそこからは舟で、瀬戸内海を通り、筑紫まで運ばれた。そして筑紫、壱岐、対馬などに配属され、任地で3年を過ごさなければならなかった。その間、残された家族に税の免除はなかったという。残された家族の生活がどれほど悲惨だったかは容易に想像できる。

実はこれらの防人歌は天平勝宝7年(755年)に、大



伴家持が各国の防人部領使に命じて防人らが詠んだ歌を提出させたものである。大伴氏というのは古来、皇室を守り続けてきた武門の家柄で、大伴家持は名門大伴氏の頭首、前の年に兵部少輔になり、防人の派遣等に関する仕事にかかわっていた。歌人でもあった家持は何らかの機会に防人たちの歌う歌に接する機会があって以前から注目していたのではないか。防人たちが酒を飲みながら、故郷に残してきた、老父母、妻や子を思い歌う歌。素朴ながらも家族や恋人への愛情や別離の悲しみ、旅のつらさが切々と伝わってくる。家持の心に「これらの歌を残したい」という思いがわいてきた。それは翌年の、防人たちが難波に集結するときの実現した。家持は難波に到着した国の防人部領使らが献上した防人歌166首の中から84首を採用したと銘記している。それらの歌に接して家持自身も詠まざるにはいられなくなったのだろうか。いくつかの国の防人歌の後に、それらの歌群から触発されて詠んだらしい長歌と短歌を挿入した。それらはあたかも防人や、その妻になりかわって詠んだかのような、およそ国の防衛担当者の言葉とは思えぬ、防人らへの同情と政策の非情さを示唆するものとなった。こうしてまとめられた防人歌巻は、時の左大臣橘諸兄に献上されて、宮廷の人々に読まれることになったと推測される。

家持が選んだ84首の防人歌を改めて見渡してみると、「行ってくるぞと勇ましく」型の歌はほとんど見当たらない。ただ1首

⑥今日よりはかへり見なくて大君の

醜(しこ)の御楯と出でたつ我は 4373

があるのみである。今日からはわが家の事はふりかえらないぞ。大君の楯として俺は行くのだから。「醜」とは「みにくい」ではなく「不肖の私」の意である。話は飛ぶが、この「醜の御楯と出でたつ我は」というフレーズは先の戦争で軍歌に引用されている。しかし、万葉集の防人歌にはこうした軍歌調の歌は他には全く見られず、別れを嘆き、家族を思って涙する悲哀に満ちたものばかりである。

⑦韓衣裾に取り付き泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして

4401

⑧難波道を行きて来までと我妹子が付けし紐が緒絶えにけるかも

4404

⑦は「父ちゃんいかないで」と泣きすぎる母の居ないあの子供たちを置いてきてしまった、と嘆く歌、この子たちはこれから先、誰が面倒をみってくれるのだろうか?と思わずにはいられない。

⑧「我妹子」とは妻か恋人だろう、無事を祈って結んでくれた着物の紐が切れた、ふるさとのあの子に何か良くないことでもあったのか、あれこれ物思いする男の姿がうかんで

くる。防人歌の中で圧倒的に多いのが、妻あるいは恋人との別れを悲しむ歌である。中にはこんな官能的な歌まである。

⑨筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹そ昼も愛しけ

4369

筑波山に咲く山百合のようにいとしいお前は夜の寝床の中だけじゃなく、昼間だっていとしいよ。現代の若い恋人たちの姿を髣髴とさせるではないか。万葉集の中にはこんな現代的感覚の歌がいっぱいある。これが1300年も前に作られていたということが信じられないほどだ。しかも実はこれが前に引用した「霰ふり鹿島の神に」の歌と同一人物が詠んだものだという。このように引き裂かれた恋人たちは多かった。それを妻の側から詠んだのが次の歌。

⑩防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思ひもせず

4425

「背」と言うのは夫や恋人をさす言葉である。だれの夫が防人になって行くの？他人事に尋ねる人が羨ましい。なぜうちの人だけが？女たちは何度答えのない問いをくりかえしたことだろうか？この構図は夫や恋人、息子たちを徴兵されたすべての女たちの、今も昔も変わらぬ叫びだった。

⑪葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕へし汝をば偲ばむ

3570

葦の葉の群れ一面に夕霧が立ち込めて鴨の鳴き声が寒々と聞こえてくる夕べ、そんな夕べにはあなたのことがひとしお偲ばれてならないよ。この1首は、巻14の東歌の中に載せられている防人歌。静寂で優雅な趣のこの歌はいったいどんな人が詠んだのだろうか？詠み人知らずである。防人には裕福な人もいたし、貧しい農家の息子もいた。この人などは教養もありそうなちょっとした家柄の人だったのではないだろうか？

こうして東国の防人たちは93年間、このような思いを抱きつつ筑紫の国に出かけていった。その間彼ら防人が来襲した外敵を迎え撃つという機会はずいぶん一度も訪れなかった。家持の選んだ防人歌を朝廷や宮廷の人々ほどの様に受け止めたのであろうか？武門の人としての家持はどのような思いを抱きながら生きていたのだろうかと思わずにはいられない。家持が防人歌を収集し防人歌巻にまとめて橘の諸兄に献上した2年後の757年には、東国から防人を送ることは廃止になった。私は家持のこの防人歌巻が朝廷を動かした、と思いたい。

解放・敗戦 70 年と排外主義

金

ジェニファー・リンド（ダートマス大学）は、植民地支配と謝罪をめぐる表層的な流れを分かりやすく提示している。リンドは、かつて支配／被支配の関係にあった国家間の関係が悪化するのには、支配した側が謝罪しないからではなく、むしろ謝罪した後に問題がより複雑になるという。つまり、今の日韓関係にあわせて説明すればこうである。1993年「河野談話」で象徴されるような植民地支配、日本軍慰安婦問題などに対する謝罪をし、それを韓国側が受け入れることで一段落するわけではない。なぜなら、日本政府が謝罪すれば、日本国内の保守勢力からそれに対する「反発（反動 *backlash*）」が生じ、閣僚の妄言や保守の組織化をもたらす。韓国マスコミはそれを報道し、日本の謝罪を認めなくなる。毎年8月15日に日本の歴代首相が植民地支配についておわびの弁を述べているものの、韓国では日本はこれまで本当の意味で謝罪したことがないと認識している。日本の保守はいつまで謝罪を繰り返さなければならないのかと苛立ちを露わにし、日本国民を扇動しはじめている。

リンドは、次のように述べている。実感したのは、日本の歴史問題の本質は、日本が謝罪していないということではなく、謝罪が引き起こす国内の論争から生まれる、ということだった。毎回、ある高官が謝罪すれば別の政治家はそれを非難し、時には日本の過去の残虐行為さえ否定する。より詳細な歴史教科書が出ると、保守層は刺激され、残虐行為を言い紛らす本を書く（『朝日新聞グローブ』2012年11月30日付）。

植民地支配に関する韓国向けの謝罪は、日本内部において謝罪を認めない保守勢力の反発をよび、妄言が相次ぐ。それを韓国側のマスコミが拡大再生産する構造が出来上がっている現状を、リンドは克明に示している。実際にリンドの図式は、新聞・雑誌などで東アジアの現状を説明する構造としてよく話題にされてきた。

問題は、リンドの主張が皮相的な分析に基づいており、展望を提示するよりは、現状を説明するに留まっている点である。リンドは日本国内の政治勢力間の合意による中道的方式での和解を日本に勧めているが、それが相手国から支持されるかは疑問である。何よりもドイツと日本、延いてはヨーロッパと東アジアにおける歴史経験の違いや特殊性を度外視した主張であり、現実性を欠くといわざるを得ない。

本当の問題は、保守勢力の反発が在特会（在日特権を許さない市民の会）を中心にヘイトスピーチに広がりつつある現状である。ヘイトスピーチがここまで拡大した背景には、マスコミと政治家の傍観が決定的だった。日本のマスコミの初期対応はあまりにも遅かった。日本のマスコミは、海外の政党にはよく「極右政治家」「極右政党」と書くが、それに相当する日本の政治家・政党には使わない。まるで「極右」勃興は対岸の火事と考えているようである。

私は、危機意識を持って在特会を分析する本に接してきたが、違和感を覚えていた。最近、樋口直人『日本型排外主義：在特会・外国人参政権・東アジア地政学』（名古屋大学出版会、2014年）を読んで、幾つかの疑問が晴れたので、その内容にふれておきたい。

なぜ、在特会のような団体に人々が集い、ヘイトスピーチを行うのか。著者は、排外主

義に関する理論に基づき、少ない先行研究を批判的に捉えなおしている。また、30人以上の排外主義者の聞き取りから、その実体に迫っている。在特会の存在を世に知らしめたルポルタージュ安田浩一『ネットと愛国：在特会の「闇」を追いかけて』（講談社、2012年）は、翌年韓国でも翻訳されて大きな話題となった（『町に出たネット右翼 거리로 나온 네티우익：彼らは如何に行動する保守となったのか』）。

安田浩一のルポルタージュは大きな反響をよび、その言説は大きな影響を及ぼしている。安田は在特会の背景として、非正規の増加などによる若者の不安や疎外感を強調している。

「末端会員」を中心とした取材が多い安田の調査と、活動家層を対象とする樋口の調査の違いは階層にも反映されている。樋口は、活動家層は学力が高く、経済的にも困窮していないとして、明確な階層的基盤がある運動とはいえないと正している。代わりに、活動家層の共通項は、保守的な政治志向をもっており、保守政党の支持者から右翼まで幅はあるものの、もともと保守的な基盤が排外主義運動への抵抗を弱めたと分析する。

私が安田の議論を読んで最も大きな違和感を覚えたのは、排外主義に連なるきっかけであった。安田は「取材した半分以上の人が日韓W杯をきっかけに韓国が嫌いになったと答えた」とする。それに対し、樋口が調査した調査対象者の中で「W杯がきっかけになった者は一名で、歴史修正主義や近隣諸国との対立を起点とする者が多かった」と述べる。樋口は、日韓W杯をきっかけとする「末端会員」は何らかのきっかけでインターネットの情報に接し、事後的に「W杯問題」が構築されたと考えた方が妥当だろうと指摘する（樋口、216頁）。

つまり、樋口は日本型排外主義の背景には、「W杯問題」「外国人経験・問題」による実体験ではなく、1990年代に根付いた「歴史修正主義」という大きな構造が存在すると分析する。外国人との直接的な接点を伴わずに、もともと保守的な政治志向を持っていた人々が、1990年代以降に「歴史修正主義」というフレームへの共感を強め、インターネットやマスコミ報道などを通して一方的な嫌韓、嫌朝鮮、嫌中意識を高めていく。著者は多様な理論を駆使して、多様な経路を通して排外主義に走るケースを典型的に分析している。

このように、隣国への対抗意識が問題の本質とは全く関係のないはずの、国内の在留外国人に向けられ、根も葉もない「在日特権」という妄想がエスカレートし、暴走しているのが今のヘイトスピーチ（日本型排外主義）である。

この問題を解決するために、著者はマイノリティの祖国（韓国・朝鮮）に対するむき出しの敵意とマイノリティ（在日）を単純に結び付けてしまう短絡的な国家意識の回路を批判する。これまで在日の問題を祖国（韓国・朝鮮）と結び付けてしか考えてこなかったつけが、今の日本型排外主義を生んでいるのではないか。日本は地域住民としての在日との二者関係を構築していかなければならない。なお、日本と同じく韓国でもイルベ（日刊ベスト貯蔵所、略称、日ベ＝イルベ）に象徴される修正主義の動きが問題となっている。解放・敗戦70年、排外主義を乗り越えるための日韓の連帯と叡智の結集がさらに求められている。



第 2 1 回交流会 光州大会

2015年7月31日(金)～8月3日(月)(3泊4日)

場所 大韓民国 光州5・18教育館

日程案 7月31日(金) 11:30 までに金浦空港着 17:00 頃光州着

団体バスで移動(4時間程度) 18:00 から開会式 特別講演

8月1日(土) フィールドワーク望月洞公園墓地、光州トラウマセンターほか

8月2日(日) 授業報告・研究協議・レセプション

8月3日(月) 全体会 閉会式 昼食後閉会

交流会参加費 300,000 ウォン程度の予定・学生割引あり

(予定) 参加者は、会費(年3,000円)の納入をお願いします。

部分参加者は実費徴収。現地までの交通費は別途自己負担。

*日韓の教育などに関心のある教員・市民の集まりです。ぜひご参加ください。

メール：larrabee1991@yahoo.co.jp FAX：045-543-7372

短信

○次回モイムで道徳の教科化について、中央大学の池田賢市さんを招いて、学習会を行います。どなたでもどうぞ。

・5月31日(日)14:00 から交流会に向けての会議 15:30 から学習会(17:00 まで)

多文化共生プラザ(新宿 ハイジア11階)

○『ウリ』読者の皆さまへ

今年3月末でクロネコメール便が廃止されたため、今号より郵送となりました。『ウリ』は日韓合同授業研究会のホームページでも読むことができます。

ウリ 98 号 2015 年 5 月 27 日

日韓合同授業研究会

事務局連絡先

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530

<http://nikkangodo.narishi.org:8080/nikkangodo>

ホームページを利用するので郵送は不要と思われる方は、事務局までご連絡をお願いいたします。(F)